

火星

平成二十五年五月号



七曜抄

(八)

山尾玉藻

花かげの犀の甲冑軋みけり

花どきの我に無頼のころあり

水ぎはといふしづけさの落椿

へうたんの酒鳴りにけり椿山

雨粒を呼び始めけり壬生の鉦

洞の眼に見られて叩く干鰈

権禰宜のかかげ行きけり桜鯛

葛苺畑に月のをとがひ浮かみゐし

通るたび仰ぎし古巢落ちゐたり

八十八夜ダイバーが岩濡らし

太白星

音立てて春の流れの合ふところ
紅梅の咲いてつめたき登り窯
餌台に雪の残れる翅音かな
ほほじろの飛びたるあとの日のゆらぐ
願ひ坂上り下りて日の永し
春の月太閤の湯に染むタオル
鼓の音して滝落つる山椿

杉浦典子

浜口高子

春の風邪きりんの首とゆらぎたる
しけの予報栄螺の角のぶつきらぼう
春の風邪干し俎を裏返す
まばたきをひとつ椿の落ちにけり
ひと棹を挿して朧を分けゆけり
紅梅や新しき雲つぎつぎと
梅の苑おでんの湯気のちぎれつつ

火星作品

山尾玉藻選

探梅や水より逸れてしまひたる
神戸深澤 鱻

料峭の音羽の滝場混みあへり

やははれし鬼の着包み毳だてり

紙鍋の紙に泡生る節替り

旧正や兄の緋裏のつつがなし

会葬の列蓬生を匂はする
八幡大山文子

紅梅やこぞりて昭和生まれなる

毛氈にこぼれ影生るひなあられ

雛納めしたる暈を乾拭きす

太閤の抜け穴いくつ梅の風

笹叢を風のひろがる針祭
宝塚蘭定かず子

ポケットの手のひら鳥帰る

雪兎かしこき耳を立てぬたり

雛市を見てふたたびの風の畦
桃花酒のさめてさみしき床柱
琅玕の日ざしを二月礼者かな
つつ抜けの土間の向うの野梅かな
薪割りの翁のけぶる春の雪
空堀を鴉のあるく梅の風
千枚の半紙一締め亀鳴けり
立春の金箔浮けるしんじよ椀
露天湯や芽吹きのにほひ殺到す
越前和紙に四角く包む年の豆
信心の足跡なりし春の泥
夫の指雛の箆笥を開けまして
坪庭のひと筋の日の春埃
ひろげたる鴉の片羽陽炎へる
青空に巢の吹かれぬるお水取
ミモザ咲く橋へまはりし霊柩車
春寒や途切れぬやうにりんど剥き

宝塚山田美恵子

宝塚山本耀子

八幡坂口夫佐子

選のあとに

山尾 玉藻

探梅や水より逸れてしまひたる 深澤 鱧

「探梅」は春に先駆けて山野を逍遙する野趣豊かなものがあるが、体はしっかり冷え込んでくる。作者も沓えざえとした谷川から気付かぬうちに逸れて、自ずと日当る山道を選んでいたのだろう。そのような心象をあからさまでなく述べたのが「水より逸れてしまひたる」である。

毛氈にこぼれ影生るひなあられ 大山 文字

日差しや灯の所為で毛氈に零れた雛あられに影が生じた、と一応は解せる。しかしそれでは詩情が希薄である。むしろ、毛氈に零れたあられがふと翳って見えたという繊細な感覚より生まれた表現と捉えたい。毛氈の鮮やかな真紅で雛あられの小さな柔らかな彩が一瞬曇って見えたのではなからうか。女性らしいデリケートな偶感。

笹叢を風のひろぐる針祭 蘭定かず子
嵐峡にうどんの匂ふ針祭 藤本千鶴子

味わいの違う針祭の句を二句挙げる。一句目、「針祭」の催されるのは二月八日、立春が過ぎたとは言えまだまだ冷たい風が吹く季節である。辺りの笹叢が立てる冷ややかな葉騒でそのような季節感を巧みに再現し、春寒の中で行われる女

性らしいまめまめしい祭の雰囲気を高めている。二句目、京都嵐山の法輪寺でも「針祭」が催される。祭が終り山を下ってきた冷える身に、嵐峡のうどん屋の匂いが素直に嬉しかった様子である。針祭のまめやかな風情と現実的なうどんの匂いにかんがりの落差があるが、この落差こそが人間らしくほのぼのとした気分させる。

琅玕の日ざしを二月礼者かな 坂口夫佐子

少し改まった身なりの女性が、みどり濃い竹藪から洩れる日差しを浴びながら歩いてくる。新年ほどの慶賀な景ではないが、落ち着いた喜びをもたらす一景である。

夫の指雛の箆筒を開けもして 山本 耀子

女性にとつて雛段の雛道具それぞれに思い出や思い入れがあるものだが、男性にとつてそのこまごまと精巧な作りは興味津々の対象となるのだろう。「開けもして」で、ご主人が他の雛道具もあれこれ点検済みであることが窺え、大変微笑ましい。

ひろげたる鴉の片羽陽炎へる 山田美恵子

木の枝や地面で片羽を広げる鴉を見かけることがあるが、片羽だけに気味が悪い。掲句、そんな片羽に焦点を絞ることので、辺り全体が陽炎していることを強調した点に注目した。陽炎に揺らめく鴉ならさほど悪くないかも。

は、そんな清々しい思いから生まれた瑞々しい感覚である。
(以下略)

同人 I

恒星圈

坂口夫佐子

城垣の濡れてをりたる盆梅展
なにはの灯見おろす玻璃の冴返る
雪のひま蕈の結び目燃えのこり
春雷や黄味流れだす目玉焼
あけ方の雨戸鳴らして春来る

川端俊雄

白数康弘

風花や塔に天女の透し彫
探梅や炭焼小屋を覗きもし
春雪にこゑ堰切つて下校刻
内裏雛太刀を反らせていとけなき
流し雛やにはに稚の大泣きす

虫出しの雷かと耳をかたむけて
玉虫の骸を白紙にて包む
目借どき老眼鏡を買ひ替へて
目刺焼くまなこの串を抜きながら
胸に手を置きたる目覚め閑古鳥

小林成子

大東由美子

春の雪舞ふ馬場町交差点
傘ひらき立春の雨弾きたる
外濠のくぐりじやうずな春の鳩
蹠の一本で立つ余寒かな
花桃へ閉づる勉強部屋の窓

口笛のワンコーラスに卒業す
卒業歌水面に寄れば光逸れ
春先や水の地球の目覚め初む
中空のすきますきまに春の雪
さへづりの下をぬけきし泥の靴

獅子座

山尾玉藻推薦

井上淳子

青空に籠りて梅のふふみけり
改札を野鳩のとほる四温かな
てのひらに萩焼まはす臙かな
日当れる岩の刻印 冴返る

涼野海音

湖へ一羽発ちたる雪間かな
赤松に対うてマスク外しけり
桃咲くや小さき指と指相撲
啓蟄や日の差してゐる兎小屋

田中文治

風音に鯉のうつろふ寒の明
連翹に瀬音気負うてゐたりけり
地虫出づかなしきことはやりすごし
嘴ぬぐふ雀隠れの山鴉

西村節子

火渡りの燠に水打つ夕おぼろ
ももいろの猫の鼻先余寒かな
たがへしの始まつてゐる湖のいろ
はんざきを見てきし人と春の宵

前田忍

北になほ北の空あり鶴帰る
如月の雨の木椅子に鳩のゐる
赤白のワイン添へある焼栄螺
パン種のふくらみきりし春の霜

林範昭

軽やかにたてがみ揺るる椿東風
白梅と折鶴ならべ小画廊
紅梅に息かかるほど近づけり
石垣を薫しべ飛べり春の夕

藤本千鶴子

結界の荒縄はづし垣手入
六地藏の間を抜けし春一番
焼鳥屋のバーナー赤し春の雪
愛宕山の肩はつてゐる春夕べ